

憲司は几帳面だ。

ハンカチはいつも持ち歩いているし、教科書を忘れたことなんて一度もない。何度世話になったことか。

今日も隣のクラスの奴が何かの辞書を借りに来ていた。あいつは先週も借りに来ていたな、今週は1日ぶり3回目だぞ。憲司も小言を言う割りに最後には折れちまうんだから。俺のときは何かしら条件を出してくるくせに。

俺が宿題を忘れてきたときなんて購買まで使い走りさせられたんだ。いつか仕返しをしてやろうと思う。

∴

走ると汗をかきそうな日だった。
暦の上では秋。

図書室には紙を捲る音、鉛筆の走る音、エアコンの音、他には僅かな話し声しかない。音源の一つに聡が居た。

聡はあまり図書室へ来る方ではなかった。そもそも、文字を読むのが得意ではない。読むなら漫画の方が何倍も好きな人間だった。しかしこの秋、所謂受験シーズンというのに聡も立ち向かっていた。

「お前次の試験大丈夫なのか？そろそろ試験結果が内申にも影響してくるぞ？」

「そうは言ってくれるな憲司くん。俺だってやろうとはしている、しているんだ」

「じゃあ今日は寄り道せずにさっさと帰ってやればいいだろう」

「家でやろうとするといつい漫画を読んでしまうんだ

が」

「なら図書室でやれよ。涼しいし静かだし良いぞ。俺も付き合つてやるから解らないところは聞いてくれ」

そうして2人で図書室に試験対策に来ていた、はずだった。向かい合わせに席を取り、反対側でなにやら厚いハードカバーを読んでいた憲司の姿はここには無い。聡が一人で参考書と格闘し始めてから一時間は経っていた。図書室の読みたい本は全部読んでしまったから自分のを持ってくる、と静かに憲司が言葉を残し、教室へ行ってから一時間だ。

聡は開いていた教科書とノートを閉じ、自分の教室へ戻ることにした。

「暑いな……」

廊下に誰も居ないことを確認してから聡は一人苦言を漏らした。秋とは言え、西日がきつい日は結構

な熱気が籠る。生徒の大半が下校したこの時間防犯の為か窓が閉じられているのも原因の一つだろう。窓越しに運動部の声を聞きながら短い廊下を歩く。文化部の部室があるこの階は静かだった。十二段の階段と踊り場、更に十二段の階段を二回繰り返して聡は自分の教室がある階にたどり着いた。冷房が効いている職員室を恨めしそうな目で見ながら、教室をと歩いていった。

「おい憲司、遅いんじゃないのか」

声をかけながら聡は教室に入った。教室を通り抜ける風が、白いカーテンと、聡の少し汗ばんだ頬を撫でた。

：

憲司は几帳面だ。

待ち合わせに遅刻してきたことは無いし、授業中

詰襟を誇りに思っていた。

ぼくらはいつも四、五人連れだつて帰る。住宅街の狭い路地を横に広がって互いの顔を伺いながら、おっかなびつくりの槍や剣で脇腹をつつき合いながら。自転車のベルの音がすると、誰が決めたわけでもないけれどブロック塀に沿って一列縦隊になるのがきまりだった。

そんなぼくらは、それぞれの部活だとか、補習だとか、世界を救うための計画を練るだとかそんな理由でいつも同じメンバーではなかった。夏休みが明けた教室にはふたつの空きがあったことを覚えている。

今日のぼくらはたまたま二人だった。こうして二

人で帰ることもあるというわけだ。二人なら帰り道の黒い芋虫もそれなりに小回りが効く。縦隊の先頭と尻尾で通じない伝言ゲームをせずともキャッチボールさえすればいいから楽なものだ。

駅までの間に消費されるのは本当に他愛もない話であることばかりだ。それはおよそテレビの話題であり、たまに雑誌やゲームの話であり、数週後に差し迫った中間試験のまったくはかどらない科目についての愚痴であつたりと。取るに足らないものであつたんだ。

「ふーむ」

特に会話のタネがなく会話が途切れることもある。昨日も今日も似たようなやりとりを繰り返すと気付いてしまえば、空虚な溜息が漏れるばかりだ。

ぼくは制帽のつばを目深にし、探偵の気分分で息を吐いた。古い時代の学生気取りで制帽を被っているのは学年でもぼくだけだった。かつてこの学校が採用していた帽子だけれど、こんな時代遅れのしろも

のはとつくに廃止されていてわざわざ被る物好きは
いない。

「なため息なんかついてんだよ」

「いや、考え事さ」

「考えナシにため息なんか出ないだろ」

「ぼくは具合がわるいのかもしれんよお？」

「なにが、『しれんよお?』だよ。お前、昼にかっぱ
いだ分のパン一気に食つといてよく言うわ」

「あれはさあ、勝ち分の正当な対価だろ？」

「おまえはそう主張するかもしれないけれど、いく
らなんでも食いすぎじゃんか」

机の上に山盛りのパンを載せてみたかった。とい
うぼくのささやかな夢を教室のギャンブルで叶えた
ことに彼は納得がいていないいらしかった。

「成長期なんでね。でも、パンだなんていうけれど
さ、スカスカのラスクばかり買ってきてくれたせい
で口の中がズタズタだよ」

ぼくはあーんと口を空けてみせてやる。

「見えねえよ」

「ん、ライト要る?」

確か、秋葉原で仕入れたLEDライトがあったはずだ。しかし、ぼくがカバンからそれを探すのを待
たず、彼はぼくを無愛想なジェスチャーで制止する。

「いや、そうだな、言い方が悪かった。可能かどう
かじゃない。別に俺はおまえのロン中とか見たくな
いし、見たところでどうしようもねえし、あの量の
ラスクをまんま頬張ったお前のことバカだと思つて
る」

「ああ、そりやそうだねえ。じゃあ次はみんなヤキ
ソバパンを買ってきてくれればいいんだよ。あれな
ら柔らかいから大丈夫だろう」

「飽きるだろ」

「マヨネーズは正義さ」

「俺、マヨネーズ嫌い」

会話が止まった。

ぼくにとって、この級友と話をするのは苦手な部

この国は凡庸で溢れている。

マスメディアは連日連夜、「イチローがまた偉業を達成した!」「村上春樹がノーベル文学賞!」「北野武はこの国の誇りだ!」等と、世界各国に散らばった天才達の偉業をまるでさも自分がやりましたかの様な顔して情報を垂れ流している。

日本人という人種の殆どは多少のステータスのバラつきはあるものもなんの才能もない所謂「凡庸」であり、凡庸同士が集まり社会を廻す歯車となり国を動かし続ける。勿論その歯車達は大量生産のどうという事ない性能の歯車なので期待以上の働きなんてしないし、ただ延々と廻り続ける。そして動かなくなったら社会から外されてゴミ箱にポイだ。抜けた箇所にはそこら辺に置いてある予備の歯車をハメれば万事オッケーオールクリア。この国は歯車が変

わった事になんて気付きもしない。

それがこの日本という国のシステムだ。ただ時折、どういう訳か超高級な油が差されていたり、そもそも出来自体が他の追隨を許さないクオリティだったり、ともかく他の歯車達とは何かしらが大きく異なった歯車が社会という機関に組み込まれている。

その歯車が『天才』だ。

他の歯車達はたった一個で作業能率を上げるその歯車に、羨望、嫉妬、響響、反感の眼差しを向けながらただ緩々と廻り社会を動かし続ける。動かなくなるまで。

ああ無常。

そしてさつきから超上から目線で連連と語っている(なんかこれってメタっぽいかな)僕は、

天才に恋焦がれる『凡庸な歯車』の一つ――

さて。

都内の高校の昼休み。

「つーかよー、昨日彼氏にケータイ折られてさあ。あいつマジなんなの。別れようかなあ」

教壇の上に胡座をかき、ペチャクチャお喋りをしているメイクの派手な女子高生。これは夕風さん。勿論僕じゃない。

「あー部活だるい」

「じゃあ今日サボってゲーセン行こうぜ」

「いいねえ。アレやろうぜ。銃でゾンビ殺す奴」

前の席で弁当を食べながら他愛のない会話を繰り返している体育会系の二人組。

大河内君と、鈴木君だ。僕じゃない。

「……」

その後ろの席で机に突っ伏して寝ている明らかにイケテナイ風体の彼が大村君。違う、僕じゃない。

僕が居るのは教室の隅っこ、

「フフフツ！ 昨日の『けいおん!!』観たでしょうか!？」

政治家もしくはなんとか評論家みたいな四角く分厚い眼鏡を掛け、くぐもった気色悪い声で昨日みたアニメについての話題を切り出した、大村君より更にイケてない高校生。惜しい。これは山田君だ。僕が居るのはその隣。

「勿論観たでござる。いやあ、やはり拙者日焼けしたあずにゃんは俄然ありだと思っでござる。確かにあの水着はちよつと露骨というかあざといですが、ブヒッてしまったでござる。不覚でござる。大変遺憾でござるよ。デユクリュ！」

山田君と向かい合い、昨日観たアニメの架空のキャラクターがいかにか可愛かったを熱弁している、長身瘦躯、三百眼、セルフレームの黒縁眼鏡、後ろ

ギリシャ神話によれば、古代人類に男女の区別はなく、球形をして四つの手足を持つていたという。しかしあまりに完璧であったため神によって二つに分かれた。その片方を男、もう片方を女と呼んだ。だから男と女は古来の完璧な形に戻ろうとお互いに求め合うのだという。

それならば、男と男、あるいは女と女の愛情は存在しないのだろうか？ 同性愛者は永遠に不完全で不幸である定めなのか？

「自殺の許可は完全に幸福なもののみ与えられる」ポール・ヴァレリイ。

満員の電車は効きすぎの冷房のせいで千人の憂鬱を運んで走っていた。その千人の中の一人である十七歳の少年がこの物語の主人公である。

少年は眼前に、セーラー服を着た人物が赤面して

いじらしく身を振るのを見ていた。

彼はこの人物が何者かに尻を触られていて、そのためにまるで地獄の釜で煮られているみたいに苦しげに身を振っていることを知っている。

知つていながらも少年は、神の如き冷徹な観察者としてその光景を見つめていた。

彼の見つめる先では、美しい顔が恐怖と嫌悪と不安に歪んで、背德的な気配がどこまでも広がるように、少年は精神の高揚するのを感じた。

やがてセーラー服の人物の長い睫毛の隙間から涙が、こぼれた。

それを見た少年から思わず口をついて出たのは、「何をやっているんだ」

という言葉。

少年はセーラー服の人物の肩を叩いた。栗色の長い髪が翻り、振り向いたその瞳と目が合う。

黄昏の空みたいな色をした、きれいな瞳だった。

「大丈夫ですか」

少年は弱々しく問いかけた。するとセーラー服の人物は、少し上気した表情で少年の顔を見つめ、自らの両手で少年の手をつかんだ。少年は心臓が跳ね上がり、胸骨を突き破ってでていくのではないかとすら思った。

「ありがとうございます」

可愛らしい声だった。愛されることを知っている猫のような、魅力的な声だった。少年が恋に堕ちたのは、まさにこの瞬間だった。

その時ちょうど、電車は駅について、扉が開いた。セーラー服の人物が口を開いた。

「わたし、ここで降りるんだけど……」

だけど、の続きは言われずともわかった。

「俺もここで降りるんだ」

セーラー服の人物は少し嬉しげに微笑んで、二人は並んで電車を降りた。こちらをあのきれいな瞳で見つめながら、セーラー服は、

「今日、はじめて出会ったのに、降りる駅が同じだ

なんて、運命みたいですね」

そんな運命的なことなんて、あるはずがないのだった。現実には物語のような脈絡なんてなくて、ただ嘘のあるのみなのだった。少年の降りるべき駅はまだ先のほうにあった。

「そうだね、きつと運命だ」

運命なんて、どこにもあるはずがないのに。

セーラー服はさも当たり前のようにすたすたと駅を出ようとするので、少年はさすがに不安になって、「えーと、駅員の人に通報とかしなくてもいいのかな……」

「もういいです。ちょっと触られただけで、それ以上は何もされなかったし」

「そうなんだ」

少年は安堵した。本当のところ、面倒はごめんだっただ。というより怖かった。駅員とか、警官とか、知らない大人に囲まれて一時間か二時間、何かこの件について問い詰められるなんて想像するだけで胃の